

G.ドゥルーズ「内在一ひとつの生」勉強会 2015.08.22

前回開催したG.ドゥルーズ『スピノザー実践の哲学』第4章 ※共通概念の勉強会の中で、次に取り組んでみる課題テキストとして同じくG.ドゥルーズ『ドゥルーズ・コレクション1』所収「内在一ひとつの生」を設定することになり、「勉強会育成型勉強会」としての2回目の会を開催しました。

日時 | 2015年8月22日（土）15:00—19:00

場所 | 新宿西口 ロイヤルホスト

会費 | 無料

持物 | テキスト、レジュメ

参加 | すやまゆうか、山田文恵、S・T、A・E、佐々木貴史

—

課題テキスト | G.ドゥルーズ『ドゥルーズ・コレクション1』（河出文庫）「内在一ひとつの生」
PP.一

読解の所要時間は3時間ほど、間に一定の時間で休憩を挟みながら、パラグラフごとにメインの担当を割り当てて会を進行しました。あまり簡単とはいえない課題テキストに対して、それぞれが知っていること、調べてきたこと、読んでいる中で頭に浮かんできたイメージを伝え合うことを通じて、（整理できていない箇所は多々残しつつも）どうにかこうにか私たちは「ひとつの生」や「超越論的場」といった概念を持ち帰ることができるか、その手前のあたりまでたどり着けたと感じています。

ここではいくつか会の準備としてやったことと会をやってみてわかったこと気づいたことをリストアップして会の振り返りとして記録します。

■テキストマイニング

読解をする際になにかしらの助けにならないかと課題テキストをテキストマイニングのサービスにかけて、多用されたワードの抽出とワード同士の関連性を分析しました。抽出できたデータは、個人的には劇的な効果を発揮するものではなかったと感じていますが、「なにかしらの助け」くらいにはなったと思います。このテキストの中で一番多用されたワードは”ひとつの”というものでした。このワードは原文では全て不定冠詞”une”に対応するものだろうという推測をしました（実際どうだろう）。今回はテキストを手打ちでデータ化したためそれなりに時間がかかりましたが、スキャンで取り込んだ画像を文字認識ソフトにかけたりすれば、コストと効果のバランスがとれるようになるかもしれません。引き続き試してみようと考えています。

■勉強会フォーマットからみた会の振り返りとその見直し

読解にひと区切りをつけたあと1時間ほど、勉強会を続けていく上でやり方を見直した方がいい

こと、これから試してみたいことを話し合い、次の会をやる時の方針を整理しました。

- ・テキストのボリュームと所要時間について

「今回扱ったドゥルーズのテキスト7p→160min、前回のテキスト11p→200minが所要時間。このくらいの密度(?)のテキストをパラグラフごとに細かく読解していくと、時間はページの量にある程度比例して伸びていくことになりそう。」

「これ以上ボリュームの大きいものを扱うことが時間的、体力的に難しくなる?パラグラフごとの読解をやめるとすれば、読解のレベルをいま用意しているような段落ごとのものから引き上げる必要がでてきて準備に必要なリソースが増えることになりそう。」

「まずはボリュームの大きいものをためして見て、実際に時間がかかるか試してみる。テキストの終わりまでたどり着く前に、場に疲れきった雰囲気が出たらそのときは途中でやめることにしてみてもいい。」

→大体このようなやり取りを受けて、次回は長めの課題文章を採用し、実際に会を進行した場合に時間的に体力的に(?)どうなるかを試してみることになります。

- ・進行をパラグラフごとにやる?

「質を落とさないためにも、とりあえずパラグラフごとにやる。」

「自分なりにこだわるポイントをあらかじめおさえておいて、それ以外の箇所は意識的にスルーする。」

→時間は長くなる程度がある程度予想されるため、その対策として準備の段階で自分が気になっている箇所をあらかじめ整理をしてレジюмеを作成することになります。(佐々木感想:課題テキストへのリテラシーが高いメンバーの集まりならパラグラフ→センテンスごとに読みを確認していく必要はないのかもしれませんが。この会は、そういった段階を自分なり会なりに模索している途上にあると感じます。)

- ・進行担当パラグラフの事前設定

「事前に担当するパラグラフを設定したことで、読むときにどうしても自分が担当する箇所に比重を置きがちになっている気がする。テキスト全体の理解への配慮がおろそかになるかもしれない。」

「会の当日に割り振りをしましょう。」

→パラグラフの割り振りは、会のその場で読解と進行をする人をひとりにすると、会の後半・終わったあとに体力的にすこし辛いということの対策として設定をしました。(あと準備の負荷を下げるため、という意図もあったかもしれませんが、それはそもそもすこしの外れだったかもしれません。)そのルールをすこし更新して、会の当日に進行パラグラフを決めることになります。(佐々木感想?:あみだくじかなんかですかね?)

- ・課題テキストごとに共有Twitterアカウントの作成

「課題テキストごとに参加者が共有する Twitterアカウントを作成して、そこに調べたこと、読んでいて浮かんだイメージ、読んでいて具体的にわからない箇所を書き込む→回答する仕掛け

をつくってみたい。会のログなどもそこに書き込んでいくとか」

「質問→回答はいまやり取りをしているFacebookのMessage機能でbyネームでやった方がいい」

「他の人がどう読んでいるかは自分が読んでいるときのノイズになる」

「ある程度機能を限定して試してみたい。ダメならやめる。」

「会のログを残すのは、会の外から見たときにどういうことをやっているのかわかる手だてになりそう。」

→お試して課題テキストごとに共有のTwitterアカウントを作成してみることにになります。(佐々木感想：作ってどれくらい、どんな効果がでるかわかりませんが、そのときに気になるのが、目的をある程度設定しておかないと書き込みする行為自体がうまれないのではということです。どうしますかね。。)

・参加条件について

「レジュメの完成をリスケの条件にする必要はないかもしれない」

「ここに参加している方はそういった縛りがなくても準備をするだろう」

→この集まりでは「1回以上課題テキストを読んできること」+「レジュメを作成してくること」を仮にルールとして設定した開催していました。実際にそういうルールを厳密に適用させることは難しいと考え、ルールの設定を更新しました。(佐々木感想：私が読書会で起こってしまうあまり歓迎できないこととして、ホストが会の雰囲気のためにか満遍なく参加者に配慮をして、結果的に踏み込んだ内容が場に表れづらくなることだと感じています。そういったこと状況をなるべく減らすためのルールをこれから模索していきたいところです。)

■次回の課題テキスト

エリー・デューリング「プロトタイプ論」(現代思想2015年1月号,青土社)

■日程

10月10日(土) 13:00～

10月11日(日) 13:00～

あたり、

■場所

①マンション管理室

②公民館の会議室

最後に会の中で、私たちが後に記憶を引き出すきっかけとできるようなログを紹介します。この部分はTwitterに巻き取る予定です。それでは、また次の機会に向けた準備を進めていきます。

●1h20m- 1

【1 & 2 - すやまさん】

超越論的場 主体と客体、それらがもたらす因果から解放された場
= 純粹意識

フッサール：現象学的思考・現象学的還元（ものを感じたときに解釈を意図的にやめる、先入観を捨てる）

・最初の段落難しい

・ひとつの客体～、ひとつの主体～（哲学史的な裏付けあり：カント 超越論）

→A・Eさん：超越論的とは（哲学者によって様々。カント：先天的、アプリアリ、超越論的の言い方。先天的についての認識＝超越論的認識？）

→佐々木さん：ものを見るときの見方はみなだいたい同じ。それは、インターフェースみたいなものがあらかじめ備わってる（カント）。その前に経験論というのが哲学史の中でカントの前に立ちふさがる。ものが見えるのは、経験があるからこそ。なんらかの条件が備わってものを見るという能力ができる？ 経験論は外部の情報がすべて、それにより認識する能力を手に入れる。認識をするときに、経験論だけではダメ？ 外から情報を入れ続けてきたら、どこかで認識できるタイミングがあるはずだけど、そのタイミング自体はもともと備わってるもの、所与のものとして前提されてる（カント）。

ヒューム：毎日日が昇ると明日は日が昇ると思うようになる、いつのタイミングかで。それは繰り返すこと、その条件が満たされるときに信念が満たされる。そういう条件を作る能力は備わってないとおかしいとカントの説。

・「ひとつの」超越論的場

→佐々木さん：あらかじめものがわかるってことの根拠を問題にしたい？ ここで意識してるのは現象学。批判的な文脈。

現象学＝非主体的意識の流れ？

→A・Eさん：現象学→「ひとつの客体に向かうこと、ひとつの主体に～ない」＝ドゥルーズが今まで哲学してきたことの...

→すやまさん：前のテキストに似てる

・「直接的な意識の流れによって～」が疑問なのはなぜ？

→すやまさん：言い訳？

→A・Eさん：意識の根拠だから...？

・翻訳の問題

定義する／定義されるの区別？

A・Eさん：超越論的＝経験を超越している真理についての認識

→超越論的経験論：例えば英語の勉強を続けていくうちに英語の全体の体系がわかるようになる＝超越論的？

すやまさん：しっくりこない。英語の勉強法＝脳の機能の問題で、経験によって得られたものを脳が抽出してできる。

佐々木さん：経験論の哲学的な捉え方がある。「感覚のエレメントではない」＝既存の経験論は英語のセンテンス自体が認識を形作っていく。センテンス自体の蓄積自体が積み重ね。それからさらに高次元で得られるものは（すやまさんの英語の話）＝超越的経験論？

すやまさん：[3段落5行目以降]は難しい。「BECK」（漫画）、ジョニー・ボーイの話。

佐々木さん：内在的平面と超越論的場の違い。ロックの話とかは超越論的場の方？

A・Eさん：1段落と2段落の関係。

佐々木さん：共通概念のときと同じ。認識が意識の結果として生まれてきたものとして捉えられるというのがおかしい？でてきた結果をもとに超越論的場を定義づけるのはおかしい？

・ベルグソンの注：意識と光の類似。反射する対象があってはじめて認識されるもの。

・超越するものとは：何か

→すやまさん：フッサールの現象学（りんごの例、感覚・経験を通して「超越するもの」として出現する。自分の経験や感覚を通して得られるもの？）

→佐々木さん：意識？

S・Tさん：テキストとして不十分。読み込もうとすると不十分。

佐々木さん：エレベーター、最適化＝右翼的？全体主義的？、閉じる閉じない

【3-A・Eさん】

佐々木さん：内在→スピノザだと自己原因（それ自体が根拠や原因をもっているから物事が起こる）、A・Eさんの「何者に影響されて起こることではない」がそういうこと？ものが起こるときに、それ自体が根拠になることってというのは、普通、自明のこと？客観化できてないないだけか。

A・Eさん：「内在」とは。みんな別の解釈もっている？「哲学とは何か？」の引用

すやまさん：哲学勉強会のあり方？

A・Eさん：哲学の目的は概念を創造すること→そういうものが作られるところ（平面）が内在平面。スピノザ：実態と諸様態。スピノザがその概念を発明したところ＝内在平面。

主体と客体＝内在平面で説明されたものが脱落して、超越的というような変質？内在と超越が完全に別物ではなく、内在の中に超越がある。

すやまさん：内在から超越が生まれる。

佐々木さん：3段落の真ん中＝ベルグソンのカント批判に似ている。カントはものを認識する

ときにあらかじめ備わってないと認識できないといったけど、その認識のもとを経験で得られたものをそれを通し認識してないか？ とベルグソン。ベルグソンではないかも？ ドゥルーズが何回か引用している。ものをわかるときに備わってるものがないといけないけど、カントは経験で得られたものを元にしていないか？

A・Eさん：カントがいう超越論的なものは経験論の次元で得られたものを超越的次元に移動させたものではないか。ベルグソンではなくドゥルーズ。

佐々木さん：カテゴリ。ものを認識するときのものとなるもの。厳密にこれこれがあってというものを全部カントは書き出した。12種類。これさえあれば、人間はものを認識できるというものを作ったけど、ドゥルーズはそれは経験がもとにあって作ったものと批判。経験の裏打ちがあるものを超越論的と言っているのではないか。もっと12種類のカテゴリに収まらないし、もっと生まれるものがある。内在的平面で生み出される。

A・Eさん：超越論的場は、内在的平面はそれを収容しうる主体や客体では定義されない。超越論的場と内在的平面の違い。

すやまさん：内在的平面とはよりしろ、メディア、霊媒。自分の体を通していたる。肉をもった私たちが感じ取れるのは内在的平面。そこから超越論的場を知れるような.....

佐々木さん：超越論的＝哲学的フォーマットに則り過ぎている.....

【4-A・Eさん】

- ・「生」＝ある特定の生？／「ひとつの生」との対応
- ・ひとつの生 (une) と、ある特定の (la) 生→原文ではこんな感じ？
- ・超越論的場→形而上的な概念からわたしたち自身の生へ転換がおこるパラグラフ
- ・どうやってチューニングを合わせ続けるのか
- ・メヌドビラン→フランス革命・穏健派・議員。反帝政。
- ・フィヒテはカントの不十分さを批判。

【5-佐々木】

佐々木さん ディケンズのすばらしい仕事

S・Tさん ドゥルーズは逆にこれから着想しているのでは？

ホモ・タンツム ラテン語

S・Tさん 犯罪者がなんとか～（聴き取れず）← 佐々木氏はげしく合点。

山田、A・Eさん、すやまについては、この物語はリニアに読む。

【6-佐々木】

すやまさん 赤ちゃんと犬猫の違いは？

A・Eさんさん 犬はわかってる

すやまさん 猫もわかってる

S・Tさん 赤ちゃんは自分で決められない。笑みや仕草を。自らの上に表出するものを